

岩崎美隆旧蔵私家集の検討

— 関西大学岩崎美隆文庫本『恵慶集』を起点として —

蔵 中 さやか

はじめに

岩崎美隆（文化元年一八〇四生）は、「河内国河内郡花園村の庄屋の職にありながら、身命をとして国学の研究に没入した人」として紹介される。村田春門門人で加納諸平等と交流し、和漢の書に通じた市井の博学の人である。弘化四年（一八四七）に四四歳で没した。その前年に中西多豆伎らによって編まれた蔵書目録に『杠園書目録』（関西大学岩崎美隆文庫蔵I二／〇二九・九／N一／一）がある。掲載書目には合点や丸印が付され、門人等により蔵書が検められた痕跡を留める。その奥書には、「惣計八百二拾七部／美隆写本之部二百八十二部／合千百九部／冊数／四千百四拾七冊／弘化三丙午年七月／かくあらたむるものは／喜里川里 中西多豆伎／八尾神主 友田義延

／花園 荒木美蔭」とある。往事は、四千冊を超える書籍が蔵され、その四分の一ほどは美隆の筆であったという。この目録の前見返しには「美隆家号始藤乃門ト云／コハ春門大人ノ名ツケ玉ヘルナリ／後自ラ杠園ト改ム」とあり、美隆が当初は師春門の命名により藤門、後に杠園ふじのかどと号したことも記される。

この膨大な蔵書の一部が関西大学図書館に蔵されるところとなったのは一九五七年のことである。神道、歴史、文学等に分類される関西大学岩崎美隆文庫約二八〇点の全容は『関西大学所蔵 岩崎美隆文庫 五弓雪窓文庫 目録』（関西大学図書館 一九七六年）に記される。また同書の「附録 岩崎美隆略伝」には、松尾耕三『河内名流伝』（一八九四年）の記事と折口信夫が『枕草紙杠園抄』解題として記した「杠園抄解説」（『国文学註釈叢書』第十七卷 一九三〇年）とが再録され、美隆の伝

や人物像が述べられる。⁽²⁾

岩崎文庫のうち、文学に分類される書籍には、和歌実作をまとめたものに加え、古典作品の抄出や注釈が含まれる。例えば前出『枕草紙枉園抄』は『春曙抄』に美隆の私見を加えた注釈でその書名は折口が定めたものである。他にも頭書や傍書で美隆自身の考えを、時に「美按」を付して、書き入れた書は多く、美隆の学びの一端を今に伝える。

歌書について見れば、『俊頼髓脳』の一本である『俊秘抄』は翻刻が刊行され研究に活用されている。⁽³⁾ また私家集のうち写本に限って述べれば、『群書類従』の写しや抄出が多数ある。それらを除くと、蘆庵本である『四条大納言公任家集』（契沖朱校本に蘆庵の注記を青墨で加えた本、寛政二年前波黙軒写、美隆の書き入れあり）や、『散木棄歌集』（安永八年蘆庵奥書、入江昌喜旧蔵本である合綴本『讀岐守忠度集』二条讀岐集⁽⁴⁾、美隆が尾崎正明所持本により校合を加えた『山家集』（文禄三年玄旨奥書本。紀氏辰旧蔵）と『惠慶集』が蔵される。『枉園書目録』に記されるところと比すると、蔵書の散逸は著しく、類従本を除く私家集（写本）についても数点が関西大学に帰したに過ぎないことがわかる。

本稿ではこのうち『惠慶集』（LI二／九二一・三三八／E一／

一）について論じるところから始める。以下、歌番号は『新編国歌大観』により、本文比較の際は『私家集大成』を用いる。

一

『惠慶集』の研究は熊本守雄氏『惠慶集校本と研究』（桜楓社一九七八年、以下「熊本著書」と称する⁽⁵⁾）が発端で、岩崎文庫本についても詳論が載る。全文翻刻は未掲載であるが、熊本著書は、書陵部本（一五〇・五五八、冷泉家資経本の写し）の対校本として岩崎文庫本を採用し、本文異同箇所を表示する。その本文には欠字箇所が十数箇所あることや、七八の前に和歌・詞書、一二一の前に詞書・和歌を補い得ること、末尾に歌語り的な詞書とともに独自歌三首を付載すること等を述べ、『私家集大成』解題にも同内容が提示される。その書誌は次の通りで、奥書を備える点、注目される。

二七・五×一九・〇cm 表紙 紺色無地 外題 惠慶集
(貼題簽) 内題 ナシ

墨付 五四丁 遊紙 前ナシ 後一丁 料紙は楮紙で
袋綴 歌は二行書で記し、詞書は二字下り、一面一〇行
書 朱押紙アリ

奥書「本云／以或貴所御本書寫校合之／歌林朽才在判」



熊本著書は奥書中の署名を「歌林朽才」と判読する。「才」字は「材」字と通行し歌林の「朽ちた材木、才能」の意を示すのであろう。この発想は、無能の人をあらわす「樗櫟散木」（「樗櫟庸材」「樗櫟之材」等）によるもので、この「朽」はもともととは「樗」という文字で書かれていたものかもしれない。

「樗櫟散木」に由来する奥書署名例については、武井和人氏の論に詳しい。武井氏によれば、同語を源とする署名には、次の二種が確認され、いずれも一条兼良によって使用された。

〔詞林樗散〕

伝藤原藤房筆本『伊勢物語』（古典文庫 一九九八年）

蓬左文庫蔵『玉吟集』・天理図書館蔵『玉吟集』・樋口

芳麻呂蔵『玉吟集』

〔歌林樗散藤原朝臣易直〕

陽明文庫蔵『清輔袋双紙』（外題『初学百首』部分）

加えて、兼良には「柿下庸材」（川越市立図書館蔵『長秋詠藻』の署名例があること、また『柿本庸材抄』は兼良聞書を息曼殊院良鎮がまとめたものであることも示される。

これらのうち、『袋草紙』には嘉吉二年（一四四二）の、『伊勢物語』と『長秋詠藻』には嘉吉三年（一四四三）の書写、校合の年次が記される。

「歌林朽（樗）才」については他例未見ながら、嘉吉二、三年ごろ、活発な書写活動を行っていた兼良が用いた署名に類似することを根拠とすれば、岩崎文庫本『惠慶集』の親本も同じ時期に一条兼良によって書写されたものであった可能性が浮上りよう。またもしそうであれば親本たる「或貴所御本」は、当時の兼良の周辺の「貴所」に蔵された本と考え得ることとなるが、後考を俟ちたい。

熊本著書の刊行後、冷泉家時雨亭叢書第十七卷『平安私家集四』（朝日新聞社 一九九六年）、同六十七卷『資経本私家集三』（同 二〇〇三年）に二種の『惠慶集』が、各々、田中登氏、樋口芳麻呂氏による解題とともに所収された。また川村晃生氏、松本真奈美氏『惠慶集注釈』（貴重本刊行会 二〇〇六年、以下『注釈』と称する）、筑紫平安文学会『惠慶百首全釈』（風間書房 二〇〇八年）の解説等にも伝本や本文系統に関する言

及がある。これら先行研究に掲げられる伝本関係を示すと次の通りである。

第一類（古本系・一冊本）

冷泉家資経本（二九七首）——書陵部本（一五〇・五五八）

関西大学岩崎文庫本

第二類（定家本系）

上巻のみ 冷泉家本（定家筆と別筆による。一三六首）

——書陵部本（五〇一・四〇二）等多数

下巻のみ 金沢市立中村記念美術館「越桐喜代子氏旧蔵」

本（冒頭定家筆で以下別筆、前田家旧蔵本、

尊経閣叢刊複製（一九三五年）有。一五六首

のみ

最善本とされるのは、第二類本には存しない十六首を含む第一類本の資経本（永仁四年（一二九六）書写）だが、岩崎文庫本により脱落二首分が補われる。一方で、第二類本のみに見える歌は上巻七首、下巻二首の計九首ある。

第二類本の上巻は定家監督書写本でこの系統本が広く流布した。これに対して、下巻は前田家旧蔵本である金沢市立中村記念美術館本一本のみである。その扉裏には定家自筆の識語があり、下巻の書写が先行し上下巻はそれぞれ別の親本を書写した

ものであることが読み取れる⁽⁸⁾。

この下巻本文が第一類本に近似することは熊本著書が指摘するところであるが、『注釈』は「内容面から本文系統を二つに分かち得るのは上巻の部分だけ」と明言する。さらにこの上巻も配列は基本的には同じであり、『注釈』が「第一類本と第二類本の間には若干の歌の出入りがあり、原本の形態と本文とをより忠実に伝えているのは第一類本の方ではあるが、『恵慶集』の現存諸本はすべて同一祖本から派生したもの」と述べる通りである。つまり、古本系、定家本系という対立軸をはずした今日的な分類は次の通りとなる。諸本は大きくは同一系統とみなされ、その下位分類として各々が位置づけられることになる⁽⁹⁾。

I 冷泉家資経本

関西大学岩崎文庫本

下巻のみ 金沢市立中村記念美術館「越桐喜代子氏旧蔵」本

II 上巻のみ 冷泉家本

さてその本文であるが、既に熊本著書が詞書、和歌の出入や他集との比較、三七、五九、一三八のように資経本に「本マ、」の付される箇所等を論じている。

熊本著書が特にとりあげないところから幾つか記せば、萩谷朴氏『平安朝歌合大成増補新訂一』（同朋舎出版 一九九五年）

六九「某年九月五日『河原院』紅葉合」にも所収される歌合の歌題を、資経本は「たひのかり よるのあらし あれたるやと くさむらのむし ふかきあき」とするのに対して岩崎文庫本は「いはぬ 旅のかり 夜の嵐 深秋 あれたる宿 草村の虫」とすることや、一六七、一七四に見える人名表記を、資経本は「いづれも「のふまさ」、岩崎文庫本は「のりまさ」「のふまさ」、中村美術館本は「のりまさ（補入）」「のりまさ」とすること等がある。

上巻の異同について例示すれば次のように資経本―岩崎文庫本〔資〕・冷泉家本〔冷〕の間で異なる場合もある。

三八 なきぬやと、けさそき、つる―なきぬとて、けさそき

きつる〔資〕・なきぬやと、こゑそき、つる〔冷〕

六一 あかかりし―あささりし〔資〕・〔冷〕

八〇 あさたつきしの、けふみつるかな―あさたつきしの、

みつるけふかな〔資〕・秋たつしかの、見つるけさ哉〔冷〕

下巻について見れば、中村美術館本は末尾増補歌二九六、二九七を欠くのに対して、岩崎文庫本はこの二首を有しさらに独自歌三首を付載するという違いがある。両者の本文は一致する場合も見られ、岩崎文庫本は定家の時代に既にあつた本文のかたちを伝えるものと判断される。つまり、大きくは、岩崎文庫本・

中村美術館本と資経本にわかれたることとなる。資経本―岩崎文庫本〔資〕・中村美術館本〔中〕の順で異同例を幾つか示すと次の通りである。

一八九 はるのひ―なつのひ〔資〕・夏のひ〔中〕

二〇〇 いもかたもとにうつろひにけり―いもかたもとのう

つりかそする〔資〕・〔中〕

二一九 いこまのやまのまきのはも―いこまのやまのもみち

はも〔資〕・ときはのやまの時はきも〔中〕

以上のような現況において、独自歌と独自異同を有する岩崎文庫本は、資経本と直結する書承関係のない古態を伝える重要な伝本と位置づけられよう。指摘される一、二字の欠字は、親本の虫損箇所を空白として残したことに発していると思われるべきで、これもいわば古態を忠実に留めた結果であろう。

二

本節では岩崎文庫に蔵される書籍の中から当該『恵慶集』にかかわる記載を紹介したい。

前述の通り岩崎文庫には往事の蔵書目録『枉園書目録』が蔵されている。この目録中で当該『恵慶集』は歌集ばかりを納め

る「廿三番」函の項（九ウ、一〇オ）に記される。集名にはすべて上部に丸印、右肩に合点が付され、「〇万葉集 拾、」か
ら始まり、「〇惠慶集 一、」、以下、「道命法師集」「行宗集」「相
模集」「大中臣輔親集」「林下集」「風情集」「忠盛集」「馬内侍集」
『為頼集』と連続する十冊の私家集が記される。記載はこの後、
「〇月詣和哥集 四、」「〇六条家二代和哥集 三、」で終わる。
他函にも私家集は記載されていることから、この十冊本はそれ
らとは区別し一括りのものとして蔵されていたことが窺える。

また岩崎文庫所収『藤門雜記』十七（[I]二／九一一・二〇四
／I二）には六二「諸集抄書」、六三「古哥抄」という、美隆
『扛園書目録』九ウ・一〇オ



自筆の歌集抄出書が二点ある。
いずれも出典を示して抜書す
る形式で、部類はされないが、
前者には恋、哀傷等、共通する
主題が読み取れる配列の箇所
もある。この二点には『惠慶集』
は含まれないものの当該私家
集群からの連続した抄出が確
認でき、かつて「廿三番」函に
納められていた私家集群は、単

に所蔵されただけでなく抄出歌集の原拠として美隆により用い
られ、例えば、六三に「コノ哥トモ拾遺集考合すべし」「コノ
哥ノ端書キコエカタシ群書類従本モ如此」等の注文が残るよう
に、その学びの対象とされたことがわかる。各々の抄出歌数を
掲出順（含、重複）に記しておくこと以下の通りである。

六二「諸集抄書」

『林下集』三首・『相模集』一首・『道命法師集』二首・『忠
盛集』四首・『公重集』一首・『行宗集』二首・『為頼集』
一首・『道命法師集』五首・『忠盛集』一首

六三「古哥抄」

『林下集』六首・『馬内侍集』二首・『風情集』一七首・『行
宗集』五首・『為頼集』一三首・『輔親集』七首・『道命
法師集』九首・『忠盛集』五首・『相模集』一一首・『林
下集』一〇首

実は『扛園書目録』に記される十集のうち、『惠慶集』以外
の九集については、既に岩崎美隆旧蔵私家集として明らかにさ
れるところがある。当該目録の掲載によって、『惠慶集』もそ
の中に含まれることがここに確認されたのである。さらに現所
蔵者から熟覧の機会が与えられたことにより、『惠慶集』の装
幀等も他集と一致することが確認できた。次節では、『惠慶集』

と一連となる岩崎美隆旧蔵私家集について述べる。

三

岩崎美隆旧蔵私家集として知られるのは、谷山茂氏蔵本であった九集の私家集で、そのうち『風情集』『忠盛集』は『私家集大成』中古Ⅱ(明治書院 一九七五年)の底本となっている。

研究史を辿れば、『風情集』は「梢少将公重の風情集」(大阪市立文学学会『人文研究』八一― 一九五六年一月)¹⁵で論じられ、またその本文は、谷山茂氏・樋口芳麻呂氏『未刊中古私家集一』(古典文庫 一九六一年)の校合本として使用され解題でも紹介された。一方、『忠盛集』は「平家物語と異本忠盛集」(大阪市立文学学会『人文研究』六一― 一九五五年六月)¹⁶で論じられ、またその本文は、谷山茂氏・樋口芳麻呂氏『未刊中古私家集二』(古典文庫 一九六三年)で『平忠盛集(異本)』として翻刻された。

この二集が『私家集大成』に所載されるに際しては、それぞれの解題が谷山氏によって執筆されている。¹⁷以下、『私家集大成』の『風情集』解題からの引用(以下、傍線は稿者による)により、その書誌、伝束等を示す。

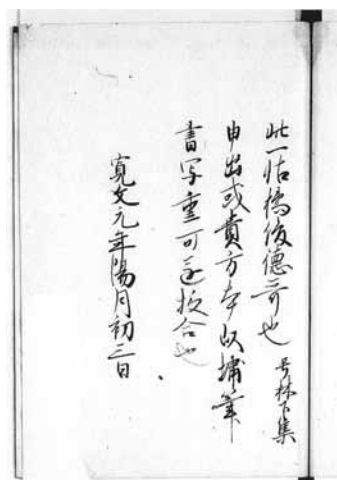
谷山本は表紙題簽に「風情集 公重」とあり、二七・三 cm × 一八・五 cm の楮紙袋綴、岩崎美隆旧蔵集中の一冊である。

この美隆旧蔵私家集の一群がもと幾集から成っていたかは知られないが、現在谷山に帰しているのは、馬内侍集・為頼集・道命法師集・輔親集・相模集・行宗集・異本忠盛集・林下集とこの風情集で、みな同装同筆である(ただし為頼集のみは異筆か)。集によっては美隆の校合書入れなどの見られるものもあるが、本文はすべて寛文ごろの一備筆の書写かと思われる。というのは、この一群同筆の私家集のうち、林下集の奥に、本文とは異筆で「此一帖橋俊徳哥也」^{引林下集} 申出或貴方本以墉筆書写重可遂校合也 寛文元年陽月初三日」とあるからである。この寛文元年十月の奥書を添えた人こそが、もともとこれら一群の私家集の蒐集者であり、おそらく同一の「墉筆」(正しくは備筆)をして、同じころに林下集以外の各集(為頼集の場合は存疑)をも書写せしめたのであろうが、残念ながらこの奥書の署名の部分^引が切り取られていて、誰のしわざとも知れない。また美隆は河内の人で、鈴屋派の村田春門に師事したが、どういふ経路でこれらの私家集を入手したか明らかでない。また『忠盛集』解題には第二類異本系の歌の出入り等に続い

て、その書誌等が次のように載る。

谷山本は、二七・三cm×一八・五cm、濃紺表紙の袋綴、表紙左肩の題簽に「忠盛集」と外題。内題はない。本文料紙は楮紙。墨付本文二八丁、一面一〇行、歌二行書、詞書二字下り。寛文頃写岩崎美隆旧蔵。

『林下集』奥書（京都女子大学谷山文庫本）



『林下集』奥書に「寛文元年（一六六一）陽月」に「或貴方」が所蔵する本を人を雇って「書写重可逐校合」したことが記されることから、同装幀の一群の私家集は同様に書写されたと思われる。その年代からこれが美隆の関与しない書写活動であることは明らかで、美隆はこれらをいずれから入手したという

ことになる。その後、時を経て、九集が一揃いのものとして一九五〇年代半ばに谷山氏の所蔵となり、¹⁸⁾現在ではこれらのうち『馬内侍集』を除く八集が京都女子大学谷山文庫本として所蔵される。

この『馬内侍集』については『思文閣書目録』一三六号（一九九三年九月）に見開き二面の写真とともに掲載されたが、現在の所蔵者は未詳である。¹⁹⁾

なお、谷山氏により『為頼集』以外は同筆かとされたその筆は、『恵慶集』『道命法師集』『大中臣輔親集』『相模集』『行宗集』が一筆、その他四集はそれぞれ異なる筆で、計五筆かと判断される（末尾図版参照）。²⁰⁾寛文元年の当該の書写機会がどれほどの規模であったかは不明ながら、複数の書写者がそれぞれに複数の集を書写したとするなら、相当数の私家集が書写されたことも考えられる。

四

従来の研究では、個々に私家集研究の中でとりあげられてきたこれらの集であるが、岩崎文庫本『恵慶集』を加え、改めて私家集群として捉え直してみたい。

『馬内侍集』と、既述した『惠慶集』とを除く八集を歌人の年代順に京都女子大学図書館の函架番号とともに一集ずつ掲げ、奥書等の書誌的な事柄や本文系統について示すと次の通りである。⁽²⁾ いずれも表紙は紺色無地、外題は貼題簽(本文とは別筆で一筆)、料紙は楮紙、袋綴で歌二行書、詞書二字下り、『為頼集』を除き一〇行書で字高は一九・〇〜一九・五cm。『為頼集』は一面八(九)行書で字高は二一・八cm。いずれも「谷山藏書」(朱方印)が捺され、谷山氏による書き込みの残る本や別紙メモが挟みこまれる本が含まれる。「統後撰」を下限とする集付は二行書と歌行間上方に記される。また朱押紙は、仮名に対するものと、和歌上方に付されるものとの二種に分かれるようだが、いつ付されたものかは不明である。尚、『忠盛集』後表紙と『公重集』前表紙には連続する水濡れの痕跡とこれに伴う破損があり、重ねて保管されていたことを物語る。以下、『惠慶集』本文と同筆であると考えられる集には集名の上に●を付した(末尾図版も同)。

○為頼集(〇九〇・Ta八八・四七三) 二七・四×一八・七cm

外題 為頼集 内題 ナシ 墨付 二〇丁 遊紙 前後ともナシ 朱押紙、集付(拾遺・後拾・千載・新古・統後)アリ 本文と同筆の書き入れと、美隆による「羊」(群)

の略字)を付す書き入れ及び頭書アリ 総歌数 八四首
奥書等 ナシ

冒頭から三詞書途中まで(半丁一面分か)の本文を欠くが、「羊(群)書類従左ノゴトシ」として内題以後の欠脱部分を美隆筆で補う。補筆の二首を除くと全八四首。現存諸本は同一系統で伝本数は少ない。資経本と同系統である三手文庫本と字母、改行位置を含め一致することが多いが、一二、三二等に小異がある。真観本(零本)に一致する異同箇所もあり、注目すべき本文である。

参考・筑紫平安文学会『為頼集全釈』(風間書房 一九九四年)

●道命法師集(〇九〇・Ta八八・四八七) 二七・四×一八・七cm

外題 道命法師集 内題 ナシ 墨付 五四丁 遊紙 前ナシ後二丁 朱押紙、集付(後・新古今・万代)アリ 総歌数 三一六首

奥書等 「道命集」本云治承四年二月十七日自筆写了」

現存する写本は稀で諸本は冷泉家承空本と同系統。当該本については『私家集大成』解題に言及があり、承空本と比較すると、一〇七下句、一三五と一三六の間に詞書と歌一首、二〇三詞書の冒頭、二四四の詞書と歌の間に歌一首と詞書が補われ、三二三は連歌となっている。一方、欠脱箇所は同解題の記載に

誤りがあり、正しくは、「二四六詞書、一五五歌〜一五七歌、二三四詞書・歌、二四九歌、二九九歌、三〇七詞書」となる。承空本の巻末追加歌、建仁奥書等はなく、本文異同多数。他例のない治承奥書がある。

参考・柏木由夫氏「道命阿闍梨集注釈」(二) (九) (大妻女子大学紀要(文系)一四三〜五一 二〇一一年三月〜二〇一九年三月、連載中)が対校本として使用。

●大中臣輔親集(〇九〇・Ta八八・四七四) 二七・三×一八・七
cm

外題 大中臣輔親集 内題 ナシ 墨付 四四丁 遊
紙 前後ともナシ 集付(後・拾・後拾・新古) アリ
総歌数 二一〇首
奥書等 ナシ

本文は書陵部一五四・五四九本と同じ第一類。ただし同本の異文注記を本文とする箇所が多数ある。八〇番歌の注記「自此奥以他本書統之」を欠くが二〇二番歌後の「百十三首」という歌数表示はある。五四番歌詞書に付された群書類従本との異同は美隆の筆。

●相模集(〇九〇・Ta八八・四七五) 二七・二×一八・六cm
外題 相模集 内題 ナシ 墨付 九〇丁 遊紙 前

ナシ 後一丁 朱押紙、集付(後・拾遺)・金・詞花・新古(今)・

(新) 勅・統後撰・統拾遺) アリ 総歌数 五九七首

奥書等 ナシ、他本歌二首と勅物を記し「一校了」とする。

本文は浅野家本の系統のうち書陵部B本に親近する。末尾に「他本哥小相公本也」として二首を記し相模と公資の勅物を載せることに加えて、重複歌の整理、連句の一句追加、二九五左注の記載等がある。

参考・武内はる恵氏等「相模集全釈」(風間書房 一九九一年)

●行宗集(〇九〇・Ta八八・四八八) 二七・三×一八・八cm

外題 行宗集 又源大府卿集 内題 ナシ 墨付 五九丁
遊紙 前後ともナシ 朱押紙、集付(金・新古・新
勅・統後) アリ 総歌数 三六七首
奥書等 ナシ

現存諸本はすべて同一系統。冷泉家本と比較するとイ本注記を本文とする場合がある他、一四六詞書・歌、二二七詞書・歌、二七二詞書を欠き、二八四・二八五の順が入れ替わる。また冷泉家本で補入する一八二歌は本文として存する。

参考・久保本秀夫氏「万治四年禁裏焼失本復元の可能性―「行宗集」第二種本・奥書解説―」(『中世近世の禁裏蔵書と古典学の研究―調査研究報告Ⅱ(平成一八年度) 二〇〇七年三月)

○忠盛集(○九〇・Ta八八・四八二) 二七・三×一八・五cm

外題 忠盛集 内題 ナシ 墨付 二八丁 遊紙 前

ナシ 後二丁 朱押紙、集付(新古・続後)アリ 総

歌数 一九〇首

奥書等 ナシ

既述した通り、『私家集大成』忠盛Ⅱ底本。古典文庫『未刊中古私家集二』所収。同系本は他に日大本のみで、日大本は谷山文庫本の二六九〜二七一、巻末の一八首を欠く古態とされる。

参考・犬井善壽氏「『平忠盛集』本文考」(『文藝言語研究 文藝篇』

四 一九八〇年三月)

○風情集(○九〇・Ta八八・六〇七) 二七・三×一八・五cm

外題 「風情」集 公重 「風情」部分は破損 内題 ナシ

墨付 九〇丁 遊紙 前後ともナシ 朱押紙アリ 総

歌数 六三三首

奥書等 「保元々年之比類聞万人之／慶賀独愁一身之沈淪／

矣」

既述した通り、『私家集大成』底本。虫損箇所が多い。他に古典文庫『未刊中古私家集一』所収の佐佐木信綱氏旧蔵(天理図書館現蔵)本があるのみ。

○林下集(○九〇・Ta八八・四八九) 二七・四×一八・六cm

外題 林下集 上下 内題 林下集上四季部 林下集恋哀

傷雜 墨付 六五丁(上三二丁分、下三三丁分) 遊

紙 前後ともナシ、上下の間に白紙一丁アリ 朱押紙アリ

合点アリ(千載集入集歌) 総歌数 三七九首

奥書等 「此一帖橘俊徳哥也号林下集／申出或貴方本以墮筆／

書写重可遂校合也／寛文元年陽月初三日」(署名部分、切り取りか)

現存諸本はすべて同一系統。慶應本と漢字仮名の用字が近く、二八七、二八八の欠脱状況や他本に存する大永奥書がない点も一致するが、四五の行文による重出歌はない。一、二字の脱落等、小異がある他、二七一歌の下句を欠くが、慶應本の脱字を補う場合もある。

以上のように、『風情集』『忠盛集』が極めて稀な本であることに加えて、冷泉家本と同系ながら異同が多数あり伝来は別であったと考えられる『恵慶集』『道命法師集』『行宗集』を含み、これらが研究上、貴重な私家集群であることが明確になる。寛文書写奥書にいう「或貴方」とは一体どのような人物であったのか、また他に書写された私家集はなかったのか、『為頼集』のみ本文書式が異なるのはなぜか等、疑問は多く残るが、江戸

期前半に行われた私家集コレクションの書写活動として注目される。次節では私家集コレクションという観点から、近時の研究動向と照らし、考察を加えたい。

五

当該私家集群の書写時の全容は不明ながら、書写時から一五〇年以上を経て岩崎美隆の蔵書となったときには十集であった。稀少な『風情集』『忠盛集』等を含むとはいえ、この十集は平安中期から末期に至る、群小歌人を含む私家集群である。あえてこの十集だけを選んで書写する理由は見当たらず、多くの私家集中から残ったのがこの十集であった、という考えの方が自然に思われる。

作者の身分階級別に十集を分類すると次の通りとなる。僧、女房を含むことも考え合わせれば、元々は私家集作者の身分分類の各層を集めた大部なコレクションであったのでなからうか。

左大臣―『林下集』

従二位―『大中臣輔親集』・従三位―『行宗集』・従四位太皇太后宮大進―『為頼集』・四位刑部卿―『忠盛集』・四位

少将―『風情集』

僧―『惠慶集』『道命法師集』

女房―『相模集』『馬内侍集』

このうち『風情集』は現在二本が確認されるのみの私家集で、『禁裡御蔵書目録』や東山御文庫蔵『古官庫歌書目録』『春御擔子』²⁴等、近世の禁裏関係の歌書目録にはその書名が見えない。しかし柳原紀光編『砂巖』に載る「伏見殿家集目録」にはその名を留める。また將軍義尚が同日録に載る私家集を活用して『室町殿打聞』のための撰歌作業を行ったことにかかわる記事を載せる『十輪院内府記』の文明十五年（一四八三）八月十六日条には「公重（風情集）」と掲げられ、他私家集とともに撰集資料とされていた。つまり、中世に存在が確認される『風情集』は、近世において、禁裏に所蔵された痕跡が窺えない集ということになる。

さらに興味深いのは十集のうち、『風情集』に加え『大中臣輔親集』から『忠盛集』まで、従二位以下の男性官人の五集全てがこの「伏見殿家集目録」に見えることである。同日録及び伏見院周辺の書写活動等については小川剛生氏「伏見殿家集」をめぐる問題」「伏見院の私家集蒐集」（『中世和歌史の研究』）²⁵が詳論す

撰歌と歌人社会』塙書房 二〇一七年、第八・九章）が詳論す

るところで、以下の本稿でもその学恩を忝くする。

小川氏によれば、平安中期から鎌倉前期までの私家集六十五種を載せる「伏見殿家集目録」は「光厳院から嫡流伏見宮に伝わった、持明院統朝廷の私家集コレクション」三櫃のうちの「家集中」に相当するもので、その配列は上中下で神仏・帝王から僧・女房まで作者階層別で、「家集中」には中納言から六位までが記される。「伏見院本私家集」（仮称）は伏見院宸筆を核とする家集群で、足利義尚による私撰集『室町殿打聞』の編纂の際に活用されたと推定され、実際に現存伝本や古筆切の中にこの系統のものが認められる。例えば三手文庫今井似閑奉納本の『千穎集』『安法法師集』『権大納言典侍集』『家経朝臣集』『親隆集』『為頼朝臣集』『藤原相如集』の七集はいずれも同装幀で書誌の特徴が同一、筆蹟は複数ながら同環境、同時期に書写されたものであるという。この三手文庫本『千穎集』『安法法師集』は資経本とは別系統、『家経朝臣集』『為頼朝臣集』も真観本に近いが冷泉家本との書承関係はなく、伏見院本私家集には、さほど離れていないが冷泉家本に対して独立的であるという共通点があり、「伏見院本私家集は、半丁一〇行書、和歌一首二行書、詞書二字下げ、和歌行間上方に墨で集付を付し、字高は一八〜一九cm、列帖装の四半本であったと推定」される。

右のような小川氏の見解を参考にすれば、岩崎美隆旧蔵私家集もまた三手文庫本と同様に伏見院本私家集に連なるものかとも考えられるのであるが、さらなる考証は個々の私家集の研究の深化と合わせ今後の研究課題としたい。

おわりに

関西大学岩崎美隆文庫に蔵される『惠慶集』の検討から開始した本稿は、岩崎美隆がかつて蔵した私家集群の個々の本文が、私家集研究上、一定の価値を有するものであることを明らかにするとともに、私家集「群」という視座から、寛文期かと想定されるそれらの書写活動の周辺についても言及した。

『冷泉家時雨亭叢書』（朝日新聞社）全百巻の刊行により、私家集研究は新たな局面を迎えた。冷泉家には私家集毎に複数の系統の伝本が蔵される。研究が進められてきた結果、処々に蔵される私家集の伝本の多くが冷泉家に蔵される資経本、真観本、承空本等の同系本として連なることが明らかとなった。今後は、冷泉家本とは別系統の本文に着目し研究することが重要になってくることはいうまでもない。三手文庫本が独立した系統をもつ本を含むものとして注目されてきたように、岩崎美隆旧蔵私家

集も一群の私家集として再評価されるべきものである。

図版

● 『惠慶集』表紙



冒頭



○ 『為頼集』表紙



冒頭



● 『道命法師集』表紙



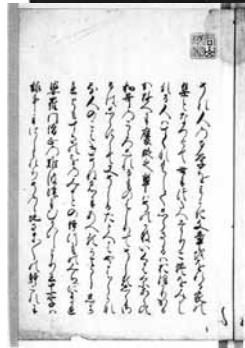
冒頭



● 『大中臣輔親集』 表紙



冒頭



● 『相模集』 表紙



冒頭



● 『行宗集』 表紙



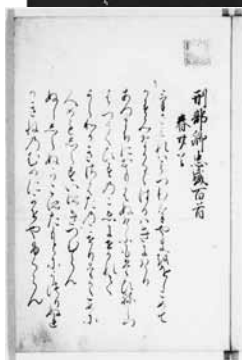
冒頭



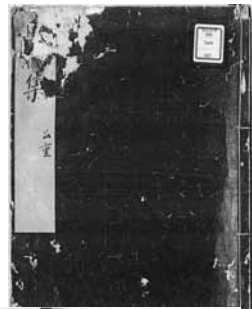
○ 『忠盛集』 表紙



冒頭



○『風情集』表紙



冒頭



○『林下集』表紙



冒頭



注

- (1) 関西大学図書館報『籍苑』第二〇号（一九八五年四月）に掲載される石尾芳久氏の文章より引用。
- (2) この他、『枉園詠草』（土橋眞吉校訂 一九一六年）に載る「岩崎美隆先生傳」には家系や交遊についても述べるところがある。
- (3) 俊頼髓脳研究会編『関西大学図書館蔵 俊秘抄』（和泉書院二〇〇二年）。
- (4) 曾根誠一氏「小沢蘆庵の家集収集と入江昌喜（三）——『散木棄歌集』の検討（上）」（『花園大学国文学論究』三五 二〇〇七年二月）、同氏「小沢蘆庵の家集収集と入江昌喜（三）——『散木棄歌集』の検討（下）」（『花園大学日本文学論究』三六 二〇〇八年二月）参照。
- (5) 所収論文の初出は「図書寮本惠慶集（五〇—一四〇—）」について一定家自筆本の原型」（『国文学攷』三二 一九六三年一月）、「古本系統の惠慶集について——関西大学蔵（岩崎美隆文庫）本と書陵部蔵（図書寮二五〇—五五八）本」（『国語国文』三五—八 一九六六年八月）等。
- (6) 「伝藤原藤房筆本『伊勢物語』攷——奥書・勘注をめぐって——」（『二条兼良の書誌的研究 増訂版』（二〇〇〇年 おう

ふう)の《追補》部分。

(7) 「或貴所御本」という表現は時雨亭文庫蔵『躬恒集』の建長四年真観奥書、同『範永集』の建長六年真観奥書に見え、福田秀一氏『中世和歌史の研究』(角川書店 一九七二年)には「(九条) 基家所持本が当時少くとも一部では「或貴所御本」と呼ばれることもあった」(一四一頁)とあることを小川剛生氏よりご教示頂いた。

(8) 識語は次の通り。「此集若有上下卷歟先年所／持其集有他哥此草子不見／猶可尋之」「此集家本依引失随借出令書写之处／名哥多不見成哥又借求之处已候／半分也仍所書加端也」。その事情は前出の冷泉家時雨亭叢書『平安私家集四』解題に詳しい。

(9) 資経本を元にⅠの三本の歌の出入りを勘案すると、総体は三〇六首程度であったか。尚、Ⅱ冷泉本は、冒頭の配列異同や合理的に本文を整えようとする傾向があり、Ⅰ系統を避けずる本文ではない。

(10) 『百人一首』歌としても著名な一〇一歌「やへむくらしけ(二字空白)るやとのさひしきに人こそ見えね秋はきにけり」の詠作機会として知られ、歌合ではなく歌会かともされる。

(11) 冷泉家本は当該箇所を欠脱する。

(12) 人物考証については『注釈』、福田智子氏『平安中期私家集論』(勉誠出版 二〇〇七年) 参照。ここでは資経本と中村美術館本が対立するところにおいて、岩崎文庫本表記が中間的である点に留意したい。

(13) 岩崎文庫本のみ奥書の前に歌語的な詞書を伴う和歌三首を付載するが、これについては別稿にて改めて論じる。

(14) 岩崎文庫所収『藤門拾葉』(LI二／二八九・二五／I二)には書肆から購入した際の書付(「書価書付」)等が僅かながら現存するが、当該私家集群については記載資料がなく、入手時期や代価等は不明である。

(15) 『谷山茂著作集六平家の歌人たち』(角川書店 一九八四年)第四章に「藤原公重の風情集」として再録。

(16) 注15同書第一章に「平忠盛と異本忠盛集」として再録。

(17) いずれも谷山茂氏『中世和歌の想念と表現』(思文閣出版 一九九三年)に再録。

(18) 『未刊中古私家集二「忠盛集」解題に「実は、往年この本と同筆同装の私家集数点を一括して入手した」とある。

(19) 竹鼻續氏『馬内侍集注釈』(貴重本刊行会 一九九八年)による。「御所本系統の一本として軽視できない写本」とさ

れる。

(20) 筆跡の判断については田中登先生にご教示を賜った。特
に記して深謝申し上げます。

(21) 記述に際しては、京都女子大学図書館『京都女子大学図
書館蔵谷山文庫目録』、『私家集大成』解題、『冷泉家時雨亭
叢書』解題を参考にした。

(22) 日本は擬定家本であることを小林一彦氏よりご教示頂
いた。

(23) 未紹介の古筆切に日比野浩信氏蔵の一葉がある。伝称
筆者は鴨長明(琴山極め)、南北朝期写か。一二四詞書から
一二六詞書まで(和歌一行書で六行分)で、問題となる異同
はないが、現存本より書写時期が古く注目される。以上、日
比野氏のご教示による。

(24) 久保木秀夫氏「万治四年禁裏焼失本復元の可能性―書陵
部御所本に基づく」(吉岡眞之氏・小川剛生氏編『禁裏本と
古典学』塙書房 二〇〇九年)掲載の翻刻による。

(25) 初出は「私家集の蒐集と伝来―砂巖所収「伏見殿家集目
録」をめぐる問題」(『武蔵野文学』五七 二〇〇九年十一月)、
「伏見院の私家集蒐集とその伝来について」(『斯道文庫論集』
四八 二〇一四年三月)。

【付記】本稿は和歌文学会関西一二月例会第一三二回(二〇一九
年二月七日 於、京都大学)の口頭発表に基づく。発表後、
御教示くださった諸氏に感謝申し上げますとともに、資料閲覧、
書影掲載をご許可くださった関西大学図書館、京都女子大学
図書館に、またその過程でお力添えくださった大谷俊太氏に
深謝申し上げます。そして本研究の契機をお与えくださり当
初より見守り折々にご教示くださいました田中登先生に、衷
心より御礼申し上げます。

(くらなか さやか/神戸女学院大学教授)